



林顯三編
河崎曾平閱

北海紀行

五

ル 4
3661
5



門 九 4
3661
5

林顯三編
河崎曾平閱

北海紀行卷之五

加賀

林顯三編
河崎曾平閱

七月三十一日曇晴 暑寒辰 午后二時檢六十

九度

午後五時三十分宋也ヲ出帆シテ柄太州自主ニ
至ル航程十八里

此日風向午未ノ間ヨリ生シ船司出帆ノ報ヲナ
ス直チニ乗船水主十二人ト共ニ針位乾ニ向テ
馳ス須臾ニシテハッシヤブ岬ヲ越へ沖合六七里

昭和二十四年
三月十日

ヲ出ルヤ針位艮下リニ向ケ汐ニ沿行シテ船ヲ
 斜ニ扱ヒ厩四時三十分時間ニシテ自主ヨリ二
 里許ノ處ニ迎接シタリ然ルニ風向稍變シ逆風
 頻リナリ速ニ帆ヲ卸シ艦楫ヲ以テ扱フト雖モ
 加ルニ引汐急ニシテ果敢取ラス動搖亦甚シ漸
 クニシテ午后四時四十分自主海岸ニ著スル
 ヲ得タリ始ハ十六里程ヲ四時三十分ニシテ趨
 リ後ハ二里程ヲ四時四十五分ニシテ達ス風波
 變化ノ計リ難キハ數年實功ヲ積ミタル舟人ト
 雖モ其見極メ難キト此ノ如シ人カノ及フ所ニ

非ス北ノ朝堂ヲ見テ
 柄太州自主官邸當時閉邸會所伊達柵原合併持場辨天
 社一社土人家五十戸人員不詳板倉三
 戸會所昆布少々
 生産物
 當處ハ物産ナク唯通行人ノ為メ會所ヲ設置ク
 ノスニシテ實ニ貧困ノ地ナリ故ニ漁業ノ節ハ
 土人楠溪禮泊邊へ至リテ出稼漁ヲナス當處ノ
 地形山崖屏ヲ立タル如ク尾崎ハ絶壁屹立レ自
 然ト其形容城砦ノ如シ土俗或ハ義經判官ノ築

キ給ヒシ城跡ナリ凡言傳フ海上過カニ利尻ノ芙蓉峰忽然ト白雲間ニ出顯ス

八月一日曇晴微風 暑寒辰 午前六時自主檢

六十四度 午前十時ヒレヤサン登リ檢七十度

午前六時自主ヲ發シテ禮泊ニ至ル路程十里餘此間人家ナレ

自主會所ヨリ楠溪へ三十五里西海岸西富内迄三十三里四丁三十五間同所ヨリ十二三町ニシテ「コハタ」ト字スル地アリ先年秋田藩支配ノ頃此処へ陣屋ヲ設ケント地形ヲ經度セシニ

中頃ニシテ廢シタリト今尚其跡アリ一里餘ニシテ「ト」岬ト云アリ西海岸ノ最海角ニシテ知床ノ尖ト五角セリ「ト」ヨリ少シ此方ニ楠溪へノ小逕アリ崖ノ山間ヲ經テ海岬へ達ス此邊ヨリ漸々ト巖石ヲ攀行クナリ二里許ニシテ字「ト」イサスト云前後十七八丁許ノ間小家ノ如キ大石峨々トシテ海岬ニ峙チ行路皆稜角ヲ踏ム或ハ登リ或ハ下リ唯石ヨリ石ヲ攀行クナリ左方ハ屹然タル山ニ接ス三里許ニシテ字「ト」井ト云四里ニシテ字「ト」ヤシヤウト云此処ニ軒

破レタル休息明小家アリ此処ノ海岸ヨリ二丁
 許沖ヘ離レテ大小ノ岩ニツ突出セリ土人「カモ
 イ」岩ト云又此明小家ヨリ半里許ニシテ海邊ヘ
 突出シ終ニ往來ヲ斷ツニ至ル仍テ微ナル小徑
 ヲ求メテ山ニ攀チ溪ニ下ルヲ半里許是ヲ「ビシ
 ヤサシ」登リト云山嶮ニシテ徑尚ナキカ如シ蔓
 草恣ニ繁生シ枯木縦横ニ倒レテ歩太タ困ナリ
 是レ春来通客ノ稀ナル證ナリ山間欸冬ノ大ナ
 ルモノ廻リ四五寸丈ケ五六尺葉ハ小サキ傘ノ
 如キモノ幾多ナルヲ知ラス六里ニシテ字「ムコ

ツト云七里ニシテ字「チイト」云八里ニシテ字
 「ホロノマイ」ト云此邊驚多シ九里ニシテ字「ナイ
 チヤ」ト云此処ニ幅四間許ノ川アリ此処ニシテ
 夕陽全ク没ス夜九時四十分禮泊ヘ著ス
 禮泊 番家 伊達栖原 合併持場 土人家 六戸
 生産ハ昆布鮓厩ヲ漁ルト雖モ兩三年爾來番家
 ヨリ土人ヲシテ楠溪邊ヘ纏メテ漁業ヲナサシ
 ムルナリ
 八月二日晴 暑寒辰 午前六時 禮泊 檢 六十四
 度 午後二時 ウルヲ檢 七十三度

午前六時三十五分禮泊ヲ發シテベフルナイニ
 至ル路程十一里餘此間堅キ砂地ニシテ路極テ
 宜シ一里ニシテ字「ボンビシヤウ」ト云二里ニシ
 テ字「フルイト」云幅八九間許ノ河アリ大雨満水
 ノ節ハ案内ノ土人ヲシテ桴ヲ編セ渡ルナリ箇
 様ナル所往々ニアリ依テ土人ヲ連レサル井ハ
 用ヲ缺ク度々アリ此処ノ河ヘ「ウル」番家ヨ
 リ十二三人ノ土人ヲ出レ罾網ヲ下シテ罾八十
 束千六百尾ナリ「昨朝ヨリシテ漁リタリ三里ニシテ
 字「トマリ」ヲシテ「ナイ」ト云四里ニシテ字「ツノ」ト

云五里ニシテ字「ベスト」ト云六里ニシテ字「モ
 シヤ」ナイト云八里ニシテ字「ウル」ト云番家四
 戸土人出稼家十七戸産物罾アリ此処ヨリ丸木
 舟ニ乗レ磯際通り「ポロ」ナイ「ボ」ニ至ル路程二里
 餘番家一戸土人家七戸生産物罾四百束許「ポロ
 ナイ」ヨリ再ヒ舟行夜九時三十分「ベフル」ナイ
 ニ著ス路程一里三丁「ポロ」ナイ「ボ」ヨリ「ベフル」ナ
 イニ至ルノ舟行波高クシテ舟ニ打被セタル
 再度ナリ全身衣服ト共ニ大ニ沾濡セリ
 「ベフル」ナイ 番家 一戸 土人家 七戸 罾

三百束

番家ハ唯漁業ノ為ニ設ケタルモノニシテ白屋ナリ夜衣モナク圍爐ノ傍ニ焚火ヲ脊負フテ官崎ト共ニ卧スト雖モ終夜蚤ニ刺責セラレカ為メニ安眠スルヲ得ス

八月三日陰晴 暑寒辰

午前五時ベフルナイ

檢六十二度 午後三時五十分ニユレユヤ檢六十八度

午前五時三十分ベフルナイヲ發シテ楠溪ニ至ル路程十三里餘ベフルナイヨリ二里ニシテ

ウタカト云番家一户土人家十戸許此処ニ西川ト云川アリ是ヨリ十二三丁ニシテ東河ト云大河アリ幅八十間許舟ヲ以テ渡ス此河ニテ鱒二百石許ヲ得ル河ノ向ニ番家アリ土人家十五戸許西川東河ヲ併セテルウタカト云是ヨリ三十丁許ニシテボシト云番家一户土人家五戸アリ此邊土人ハ多分蝦夷語ノミヲ遣フカ故ニ太々通シ難シ偶々魯國ノ農兵往来スルアリ俱ニ談笑スル土人ヨリハ却テ情ノ通スルカ如シ此邊魯ノ農兵ヲ見ルト十人餘皆丈ケ高ク大ナル

者ハ七尺餘モアリ汚衣麁服ヲ著シ桶ヲ携ヘ各俗ニ云フ河原覆盆子ト云モノヲ採ル何ノ用ニスルヲ知ラス後日之ヲ聞ケハ彼ノ農兵給養ノ乏シキヨリシテ間暇アレハ山野ニ奔走シテ菓實ノ類ヲ採テ食料ノ補トスト云リルウタカヨリ一里半餘ニシテソツカヌシト云土人家二戸是ヨリ五六丁ニシテシユシユヤヘノ渡海場アリ直徑一里餘此処ニハ舟人俱ニナシ故ニソツカヌシヨリ土人ヲ雇ヒ通常風波ノ困難ナキ時ハ此処ヨリ渉ルナリ陸路ハシユシユヤニ至ル

間灣ニ浴フテ二三里程ナリ
 シユシユヤ 番家 一戸 土人家 十戸
 産物ナシ土人家ノ傍ニ山丹人天幕四張ヲ釣リ樹ヲ伐ル為メニ幕營ヲナスシユシユヤヨリ十五丁餘ニシテトマリヲシナイト云番家一戸土人家一戸魯西亞農兵假小屋七八戸アリ又十五丁許ニシテヲシエンナイト云番家一戸土人家一戸魯人ナラヌ二里ニシテウシラト云此処ニ番家一戸土人家ナラヌ魯人畑守小家一戸山丹人ナラヌ産物鮮ウシヨリ一里ニシテ楠溪

ナリ午後六時三十分楠溪旅籠屋芳島一平方へ
著ス

楠溪

八月四日晴 暑寒辰 午前六時檢 六十四度 午
右二時檢 七十五度

當地ハ元松前家世々ノ管轄地ニシテ吏屬彼是
在住スト云凡渡海ノ困ナルト寒氣ノ酷ナルト
ニ由テ内地ヨリ人民ノ來住スルヲ往日ハ太
稀ナリ然ルニ松前ノ舊商伊達某ナルモノ柄太
島中へ漁業持場出張ヲナシ海産ヲ收漁スルヲ

永續シテ今年迄ニ既ニ百四十餘年ヲ經過スト
云フ是レ本邦人ノ此島ニ漁業ヲナス開宗ナリ
其後一度ヒ舊幕府ノ直管轄トナリ函館奉行是
ヲ統括ス安政ノ始メ堀織部正此地ヲ巡見シテ
地理ヲ視察シ是ヲ幕府ニ告ケ而シテ翌年函館
奉行ニ任ス其後更ニ諸藩ニ令シテ南北兩島ヲ
分轄セシメ以テ各地ヲ開カシム當地ハ仙臺秋
田松前ノ三藩之ヲ管ス幕府版圖奉還后去ル壬
辰ノ年六月始テ開拓使官員派出シ農工百五十
人許ヲシテ更ニ土功ヲ起シ道路ヲ開キ役邸ヲ

造營セシム其頃ハ未タ當地ニ魯人ノ住スル稀ニシテ南海岸楠溪ヨリ十二里餘ニシテ遠淵ト云地ニ彼カ本部ヲ置キ家屋二十五六戸ヲ建造シテ國民ヲ移セリ己己ノ年ニ至リ魯人始テ楠溪ニ隣セル母子泊ノ地ニ来リ假家ヲ營シ國人ヲ移サントシテ開拓使トノ間ニ議論ヲ生ス然ルニ彼頻リニ雜居ノ説ヲ唱ヘ漸次ニ家屋ヲ造營シテ遠淵ニ住スル処ノ國民ヲシテ母子泊ニ移シ領地ヲ廣開セリ庚午ノ年ニ至リ更ニ外務省ヨリ官員派出シ農工二百人許ヲ渡海セシメ

開拓使出張官員ト俱ニ大ニ地ヲ開カントス外務大丞丸山氏之ヲ總括ス翌辛未ノ春ニ至リ彼ト常ニ苦情ノ絶サルヲ以テ交際上ニテ事ヲ定ント丸山大丞東京へ出シカド事果サステ外務ノ手モ追次ニ引取リタリ而メ后魯人年々家屋屯所ヲ倍增シ國民ヲ遠淵ヨリ遷居セシメテ今ヤ既ニ遠淵ノ地ハ顧サルカ如シ楠溪内官營私家并人口

支廳 役邸 十四戸 病院 營繕局 邏卒
 屯所 當時邏卒九名 諸品取扱所 東京等ヨリ日要ノ諸品ヲ廳ニテ買上

上ケ會所
下ケ月々
隆恩生育
工民長屋
銀五棟
四名商業
三戸商業
商等荒物
ケテナリ
シムルナリ
栖原合ナリ
併持場合
通行舍ナリ
ル者ニ貸附
人家十五戸

配人ヲ
ハ八ナ
為二ハ
分七十
口二七
大工七
秋田七
屋田七
蕃麥商
豆齊商
蒸風呂
元秋田陣屋
一戸支廳
住民ノ内
一棟會所
旅籠屋
旅籠屋
會所
土

雇ヒ元價ヲ以テ住民へ
ナシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ
メシメ之ヲ官納セシ

昨壬申年中楠溪領内村數戸籍人口ノ表

村數 十二ヶ村 官員 三十五人 同

家族 三十三人内 男九人 女二十四人 邏卒 六十人

人内 小頭 永住 七十五人内 男三十四人 女四十一人

寄留 百五十七人内 男百二十六人 女三十一人 出稼 六十四人

三十九人 男 土人 五百七人内 男二百二十四人

四十三人 女 二百 五十七人 男 二百二十四人

生産

陸産之部

熊 馴鹿 鷲 狐 貂

獺 金礦 銀

銅 石炭 南洋 良品 多シ

揄 ヤムニ 蒲ノ河沼 席ニ織ル トバ松 樺

海産之部

鯨 鯨 鱒 水豹 海馬

昆布

楠溪七箇場所ト云ハ楠溪 雲羅大泊

ホロアノト 楠苗 官ヲユエトマリ ユ

ウトリ云 ナイ 楠苗 官ヲユエトマリ ユ

右七箇場所近年ハ人少シテ漁業ヲナサス即

今ハ唯楠溪雲羅大泊ノ三箇場所ニ於テ鯨漁業

ヲナス收漁高大凡一萬石

當支廳管下各所出張

鶴城楠溪ヨリ西海 村數 七箇村 戶籍 二

十九戸 官員 四人 同家族 三人内 男一人 女一人

出稼 二十六人内 男二十一人 女五人 土人 二百三

十四人内 男百二十一人 女百一十人

西富内楠溪ヨリ西 村數 八箇村 戶籍 七

十七戸 官員 五人 同家族 九人内 男二人 女七人

出稼 三十人 男
 永住 十六人 内 男 十四人 女 二人
 寄留 十九人 男 五人 女 十四人
 土人 五百四十五人
 内 男 二百七十一人 女 一百一十四人
 小實 楠溪ヨリ南 村數 二十八箇村 戶籍
 六十七戸 官員 四人 同家族 十六人 内 男 七人 女 九人
 永住 五十三人 内 男 四十一人 女 十二人 出稼
 二十人 内 男 十六人 女 四人
 東白瀆 楠溪ヨリ東海 村數 十一箇村 戶籍
 三十七戸 官員 四人 同家族 六人 内 男 三人 女 三人
 永住 五人 内 男 二人 女 三人 寄留 七十四人 内

男 五十九人 女 十五人 出稼 十人 男
 土人 二百四十人
 八人 内 男 百二十五人 女 百二十三人
 右四個所ハ出張所之レアル地ナリ其外人民居
 住セル地其寂寄出張ニテ管セル地ハ
 榮濱 東海岸 村數 十箇村 戶籍 四十三戸
 永住 三人 内 男 二人 女 一人 寄留 七人 内 男 六人 女 一人
 出稼 八人 男 土人 二百七十五人 男 九人 女 三十人
 三十人 六人
 幌溪 村數 二箇村 寄留 一人 土人 五
 十六人 内 男 三十二人 女 二十四人 戶籍 八戸

楠苗	村數	四箇村	戶籍	十五戸	出稼
五人	男	土人	七十八人	内	男四十人 女三十八人
合計	村數	八十二箇村	永住	百五十二人	
内	男	寄留	二百八十七人	内	男二百一十人 女五十七人
十六人	女	出稼	百十八人	内	男百十四人 女四十四人
二千三百七十二人	内	右ハ柄太島中我政府ニ管スル處ノ戶籍人員ナリ戸數ハ皆土人家ヲ以テ算フ内地人民ノ永住或ハ寄留出稼等ヲナス者ハ多分貸下ケ長家等ニ住ス	女	千二百六十六人	

當時開拓使支廳ノ所轄ニ属スル柄太島中ノ區域ハ東海岸ハ静香楠溪ヨリヲ限ル此地ハ有名ノ大河貫流シ漁場數箇処アリテ東京函館等ノ商人出張リ毎年永續シテ收漁スト云リ西海岸ハ鶉城ヨリ五六里北方楠溪ノ地ヲ距ル一三百三十二里許ナリ右東西兩岸ヨリ以外ハ適宜ノ漁場之レナク舊幕府ノ頃ヨリシテ所轄セス故ニ運上家番家ノ類モ之レナキナリ

當地西北ノ間ニ方リ海岸ヨリ少シ距リテ小高キ処ニ能ク遠望スヘキ地アリ本邦ノ國旗章ヲ

此ニ掲ク産土ノ神社ハ其傍ラニアリ是ヨリ少
 シク溪ヲ距リテ魯國ノ國旗章ヲ掲ク傍ラニ耶
 蘇ノ梵院アリ此地ヲ母子泊ト名ク魯西亜ノ住
 民集合ノ地ナリ兩國ノ國旗迭ニ相距ルヲ直徑
 二丁ニ過ス支廳ヨリハ三丁餘北ヘ距ルナリ當
 地住民ノ内豕ヲ飼養スル者多シ皆魯人ヨリ購
 ヒ得ルナリ幣ニシテ一匹一圓五十錢位雞ハ本
 邦種ヨリ大ニシテ卵モ亦大ナリ雌雄ノ價三圓
 十五錢位ナリ
 當地ハ近頃開拓使官員多ク在勤アリシヨリ中

ニハ土人ヲシテ從僕ニ使役シ或ハ文字ヲ習ハ
 シ雜事ニ從事スルカ為ニ本邦ノ談話ニ慣レ怜
 利ノ風アリ且ツ從來運上家ノ手代支配人ノ類
 土人ノ女子ヲシテ妾婢トナス故ニ南島ノ土人
 ニ比スレハ却テ開化ニ進メリ

母子泊

此地ハ魯人集合ノ地ニシテ彼カ裁判所アリ漸
 ヲ家屋ヲ建築造營シ頻リニ國民ヲ移シ兵ヲ備
 ヘ地ヲ抄畧スルヲ年々衆多ナリ元ト遠淵ノ地
 ニ彼カ本部ヲ置キ先年來國民幾多ヲ住居セシ

メシニ追次ニ此母子泊へ移シ頗ル此地ニカヲ
 容レ勢ヒ太タ盛ナリ柄太島中其全権ナルモノ
 ヲボウコウニク彼カ官名我判ト云「マ」ジール一
 人尚詳細下條ニアリ全島中ニ住居ナス彼カ人
 民殆ト二千人皆農兵ニシテ木ヲ伐リテ家屋ヲ
 修造シ土地ヲ開墾シテ蔬菜ヲ培育セシメ備ニ
 國民ヲ安著ナサシムルノ策ヲ施ス故ニ一時土
 産ヲ起シテ利益ヲ謀ルヲ主トセス勢ヒヲ以テ
 我人民ヲ壓倒セントスル景況太シク或ハ暴動
 ヲ以テ我人民ノ家ヲ燒キ人ヲ殺シ財ヲ奪フ等

ノ所業其猖獗殆ト惡ムニ堪ヘタリ其農兵ニ
 編セシモノ多クハ刑人無頼ノ徒或ハ近年抄略
 スル地方蠻野ノ民タルヲ以テ其暴行此ノ如シ
 彼カ本國ノ民ハ刑人ヲ除クノ外ハ太タ寡シ當
 時楠溪近キ地ニ住スル処ノ農兵大凡八百人許
 ナリ

母子泊魯西亞住地家屋人員

裁判所 一箇所

兵隊屯所

六箇所内一ヶ所砲隊屯所

役人邸

十箇所

附屬所

家族ヲ有セシ

兵卒小家

婦女一ヶ

十一箇所

牢獄

三箇所内

獄一ヶ

町刑人細工
場一ヶ町

總藏數 九箇所内大砲庫一ヶ所
火藥庫一ヶ所 細工場 四箇所

厩 二箇所内一砲隊所 耶蘇梵院 一箇所
パン焼所 二箇所

蒸風呂 四箇所

犬守小家 一箇所 商店 二箇所内一ヶ所

人員 役人カピタン一名チボロノーフト
云三ヶ年前ヨリ遠淵在勤次官一名カイチン
去ル五月母子泊へ来ル

ト云 歩兵隊長一名チジヨロフト云 庶
務係 一名アラトコリスケト云 砲兵隊長

一名 ヲレシヨベンカト云 兵隊長一名
ガラベンカト云 警官一名 イレンスケト

云 日本通辨官 一名 レセニコウト云 土
人通辨官 一名 ジヤシコト云

總人員男女幼稚共千百五十二人
兵隊ハ八十人ヲ以テ一小隊トス二人ノ嚮導ヲ
置キ八人ニ一名ノ伍長ヲ置ク當時兵隊六小队
内半小队遠淵へ分遣ス砲隊一砲隊馬挽ニシテ
八砲門一砲

門ニ砲兵 兵ハ農兵ニシテ鍛工木工土工農夫都
テノ事業ニ使役ス人種ハ多分ニカライスクシ

ヘリヤノ人種ナリ

八月五日快晴 暑寒辰 午前六時檢 七十度 午

右二時檢 七十八度

午前魯ノ住民地、母子泊内ヲ散歩ス魯人練兵ヲ
ナシ居タリ其操練大約佛式ニ似タリ兵一小隊
許生兵四教ノ部ヲ演習セリ伍列太々整ハス之
レ果シテ新兵ナル可シ合圖ハ太鼓ヲ以テス譜
ハ蘭ノ舊式ノ如シ
牢獄ハ丸材ヲ以テ井樓ニ組立タル家屋ニシテ
窓ノガラハ前面ヘ厚サ三四歩許幅一寸餘ノ缺



杆ヲ左右ヘ鉤シ尖カラシタルモノヲ七八寸間
ヲ距テ、堅ニ固定シ窓ヲ破ツテ脱スルヲ防ク
番兵兩人銃ヲ携ヘ常ニ戶外ニ當直ス刑人敢テ
戶外ヘ出ルヲ禁セス然レモ戶外ヲ離レテ遠ク
歩スルヲ許サス婦女ノ牢獄モ異ナルヲナク
刑人各衣服ノ洗濯ヲナシ居レリ
商店ハ船来ノ小間物類ヲ鬻クロシヤフロイス
両店モ物品太々高貴ナリ横濱邊ヨリハ大凡三
倍位ノ價ナリ
火藥庫大砲庫カビタシチポロノーフ役邸共晝

夜番人ヲ置ク兵隊屯所内ニ入ツテ之ヲ見ル別
 = 他ト異ナルコトナシ中央ニ教導室アリテ其左
 右ニ兵卒アリ銃ハ白磨キノ二ツ「バンド」ナリ正
 冠ハ黒ノ長サ七八寸許ノフケリヲ前指シニ挿
 ス合圖方ハ赤ナリ合圖ハ喇叭太鼓共両様ヲ用
 ヲ摩擦火ヲ出シテ煙草ヲ進ム夫ヨリ各所ヲ謾
 行スト雖モ言語解セスシテ情實ヲ知ルコトナシ
 午時後歸宿ス
 魯西亞ノ通辯官及ヒ土人通辯「レ」セニ「コウ」ジヤ
 シ「コ」ノ兩人頭カ旅宿ノ椽先ハ則チ往來ナルヲ

以テ椽端「レ」ヘ来リ談話ヲナス幸ニシテ數箇條
 ヲ尋問スト雖モ政事ニ管スル事ハ皆知ラスト
 答ヘテ敢テ談セス其内一二ノ箇條答ヘタル儘
 ヲ記ス彼カ柄太島中へ出ス処ノ農兵ハ皆本國
 ノ者ニアラスヲ「コ」ス「ク」シヘリヤ種ヲ以テ多
 レトス適本國ノ者アルモ刑人或ハ下等ノ兵卒
 ニシテ人物大ニ劣レリ其使役モ亦太タ酷ナリ
 給料ハ一人一ヶ月一「ロ」フ我ニ歩ニヲ與ヘ朱ナリ麁
 食粗菜ヲ給養ス素ヨリ兵器戎服モ附與シ六年
 ニシテ始テ郷へ歸ルヲ許ス兵役中ハ都テノ諸

業ヲ為サ、ルコヲ得ス是レ西^シ比利亞^ヤ日查^カ加^サ等
 新開ノ属島ヲ拓クノ規則ナリ故ニ一日ハ兵卒
 ニアツテ練兵ヲナシ次日ハ邏卒ニ充テ三日ハ
 鍛工木工或ハ農耕又ハ山間ニ入り樹ヲ伐リ屋
 ヲ造ル等皆兵役中ノ規律ニシテ聊之ヲ犯ス者
 アレハ即チ獄ニ下シ或ハ給ヲ減ス是レ魯カ未
 開ノ地ヲ属有スル皆此法ヲ以テスト云滿州ノ
 地ハ悉ク皆魯國ノ版圖ニ歸セリ魯帝アレキサ
 ントル當年三十二歳ナリトイフ
 右日本通辨ハ荷哥斯科ノ産ナリ土人通辨ハ西^シ

比利亞^ヤ産ナリ

顯問テ曰魯國此地ニ人民ヲ移スヤ若干ノ費ヲ
 充テサルヲ得ス而シテ未タ地産ヲ起スノ設
 ルヲ聞ス何ノ益有テ為ルヤ答テ曰我國此島ニ
 人民ヲ移スヤ即今産物ノ利ヲ計ルヲ肯トセス
 唯民ヲシテ安著セシムルヲ主トス民安著スレ
 ハ地産モ隨テ起ラン故ニ民屋ヲ増造スルヲ要
 ス其言ヤ目今移住民ヲ安著セシムルヲ專トス
 レ^レ^レ之^レ實ヲ告ルニ非サルナル可シ
 八月六日晴 暑寒辰 午前六時 檢七十度 午後

二時檢七十六度

本日灣内碇泊ノ船蒸氣船一艘開拓使廳用艦雷

電丸元函館脱走人私有セレ船ニテ蟠龍ト云先年戦争ノ節破壊セシテ米利堅ニテ修理

ヲ加ヘ百五十石ヨリ千石計ノ船八艘魯西亞軍

艦一艘

當灣内ニ先年ヨリ長大ノ波戸場ヲ築キタリ其

時ハ外務省ヨリ出役シテ我人民漁業場ニ波戸

場ヲ築キテハ其障碍少カラザル所以種々掛合

アリシカド彼遂ニ不法ヲ以テ之レヲ築キタリ

トゾ

當地南海岸上ニ在ル會野ノ船頭小家ノ傍ラニ
元ト我ヨリ築キシ砲臺アリシニ魯人大砲操練
ノ時ハ謾リニ此処へ来リテ運動ヲナス仍テ先
年是ヲ破壊セリ其跡ヲ田畝ニ成シテ蔬菜ヲ植
タリ

八月七日晴 暑寒辰 午前六時檢六十九度 午

后二時檢七十五度

先年来魯人ヨリ我人民へ暴行無頼ノ所業ヲ仕
カケ住民共憤懣ヲ懷ク者多シト云凡豫テ支廳
ヨリ懇々ノ説諭アリテ一小事ヨリシテ交際上

ノ道ヲ破ラス公法ヲ以テ彼カ罪ヲ糾サントス
ル趣意ナル由ナリ其暴行近事ヲ以テ之ヲ言ヘ
ハ當春三月二十五日^{旧曆ヲ以テ}此日魯國ノ祭
日ニシテ各休業ナルニ由テ魯人灣内ヲ遊行ス
然ルニ貸附長家居住東京商蕎麥渡世茂兵衛ナ
ル者方寄留新吉ト云者自分ノ沓二足入口ノ戸
外ニ脱シ置タルヲ魯人盜去ラントス新吉之レ
ヲ見付ケ聲ヲ掛ケシニ彼魯人沓ヲ携ヘ頻リニ
逃出ス新吉近隣ノ壯者ト共ニ之ヲ追駈ケ終ニ
彼魯人ヲ捕ヘ来レリ是ハ魯人度々盜ヲ為スニ

ヨリ見附ケタル者ハ其盜人ヲ捕ヘ置キ證人ト
シテ懇ヘ出ツヘキ旨豫テ廳ヨリ布令アルニ由
テナリ然ルニ彼魯人詰問中追々我人民相集リ
彼カ人民モ數十人集合シテ互ニ爭論シ終ニ雙
方鬪争ヲ起シ拳ヲ以テ擊ツニ至ル其間ニ乘シ
テ魯人彼盜人ヲ脱シ走ラシム我人民大ニ之ヲ
憤ルト云凡魯人追次ニ引取り沓ハ跡ヨリ戻セ
シトソ同夜八時頃彼カ兵卒隊組ニテ二小隊許
太鼓喇叭ヲ吹立合圖ヲナシ會所ヘ火車ノ段ヲ
演述ス各駈集レハ果シテ會所ノ漁器小家ヨリ

出火セリ各龍吐水等ノ消防器械ヲ携ヘ消防セ
 ントスルニ魯ノ人民処々ニ隱レ居テ石ヲ擲チ
 或ハ燃杭ヲ投レテ更ニ近附クテ能ハス漸々焼
 失ニ及ヒヌ魯人其後尚會所ノ鮮業用ノ為メ積
 置ク処ノ薪ニ火ヲ放チ二百斤薪一斤ハ六尺許
 ノ薪悉ク焼亡ス尚又母子泊ニアル処ノ番家ヲ
 打毀チ是カ為メ兵ヲ所々ニ配列シ奈何ニモ近
 寄ル能ハス止ヲ得ス各居処ヘ歸リテ用心ヲナ
 セリト其后連夜十四五日ノ間ハ彼ヨリ三人或
 ハ四人ノ農兵絶ヘス我人民住地ノ境内ヘ来リ

動静ヲ覗ヘリト又右放火ノ時海邊ニ兵一小隊
 許ヲ整列シ兵隊次長カラベンカ之ヲ指揮シテ
 全ク焼亡ナサシメタリト云フ
 其后彼カ揚言ヲ聞クニ過日皆ヲ盗ミタル者ヲ
 日本人民ニテ捕ヘシヲ怨ミテ焼タルナリ兵隊
 ヲ出セシハ警衛ノ為ニシテ兵威ヲ以テ暴行セ
 レニハ非サレ凡實ハ其事暴ニ出ルヲ以テ彼カ
 其時ノ主任官ハ辭職ニ及ヒタリト言フラセタ
 リ
 本邦人民ノ説ニハ彼レ勢ヒヲ以テ頻リニ當地

ヲ拓キ嘗テトウブツノ地ハ彼カ本部ナリシニ
 近年漸々當地へ移住シ家屋ヲ増營シ大ニカヲ
 盡セリ我人民此処ニ鯨漁業ヲナシテ彼カ住地
 内ニ漁器雜具小家有テハ障碍トナリ暨其臭氣
 ノ太タシキヲ厭ヒ斯ル争ヲ名トシテ今後我人
 民ニ鯨業ヲナサマラシメ而シテ其地ヲ奪略セン
 ト欲スルナリ右盜争ハ一時ノ小事ニシテ私怨
 ヲ以テ名トセサレハ名義ノ立サルヲ以テナリ
 トノ巷説アリ

去ル辛未年信州産市藏ト云者函館へ居住ヲナ

シ前年ヨリ當処へ至リ辛苦シテ金六十圓ヲ貯
 へ此金ヲ携へ同年八月中旬頃當処ヨリ函館へ
 歸ラント欲シテシユシユヤニ至リソツカヌシ
 ニ至ラント舟ヲ求ムレト時刻遅キ故土地ノ者
 之ニ應セス偶魯ノ農兵三名舟ヲ出シテソツカ
 ヌシニ至ラントスル者アリ幸ニシテ市藏彼ニ
 頼ミ渡賃五十錢ヲ約シテ舟ニ乗リシユシユヤ
 ヲ出タリ其后日ヲ經テ沿海ノ草原ニ老人ノ死
 骸アルヲ見付ケ人々不審ニ思ヒ之ヲ見レハ身
 體悉ク腐敗シタレト著類等ハ右市藏ニ粗似タ

リ然レモ確證ナキ故夫レトモ定メ難ク此段支
 廳へ届ケテ檢使相濟ミ之レヲ埋メ置キタリ其
 后彼ヨリ我人民ニ告テ曰ク明日日本人民ニ説
 話致シ度義之レ有ルニ就キ一同彼カ住地へ来
 レト各何事ナラント尋シニ過日市藏ト云日本
 人ヲ魯ノ兵卒中ニ殺セシ者アリ此事ヲ演説セ
 ン為メナリト云フ由テ翌朝彼地ニ至レハ牢獄
 ノ前ニ集メ内ヨリ刑人兩名ヲ出シ通辯ヲ以テ
 彼ノ刑人ノ口上ヲ演テ曰ク當八月中旬頃シユ
 シユヤノ渡ニテ市藏ト云日本人ヲ舟ニ乗セ渡

賃二歩ヲ約シ舟ノ中ニテ右賃ヲ請取ントセシ
 片外ニ多クノ金ヲ持タリ依テ之ヲ縊殺シ其金
 ヲ奪ヒ灰骸ヲ叢中へ投セシナリ然ルニ右市藏
 ノ亡靈毎夜我等三人ノ処へ来リ我ヲ殺シタル
 次第ヲ我人民へ疾ク白狀セヨト責ルヲ久シ寂
 早匿スヲ能ハス止事ヲ得スレテ此事ヲ白狀ス
 ルナリト言出セリ依テ右死骸ハ市藏ナルヲ判
 然タリ其后彼ノ刑人ハ死刑ニ處セラレタリト
 云説ハアレモ其實ヲ詳ニ知ル者ナキ由ナリ
 八月八日晴 暑寒辰 午前六時檢 六十八度 午

時檢 七十八度

昨年正月七日頃ノ事ナリ函館在ノ農藤次郎弁次郎兩人外妻都合三名先達テヨリ當所ニ来リ楠溪ヨリ八里許東ノ方カマドマリト云処ニ伊達持場會所ノ番家アリ右三人此番家守トシテ居住漁業ヲ為セシニ同日魯國ノ刑人四名来リ食ヲ乞フ弁次郎同妻兩人ハ病氣ニテ打卧シ藤次郎應對ニ及フト雖モ彼レ次第ニ暴動ヲ以テ携シ所ノ鉞ヲ以テ即時ニ打殺シ些少ノ米金ヲ残ラス奪取り右番家ニ火ヲ放チ其后近邊ノ林

中へ隠レ行衛知レサリシヲ彼カ兵卒右四人ヲ搦メ取り糺彈セシニ其證分明ナリシト當五月頃楠溪ヨリ半里許東ノ山間ニ東京ヨリ来リシ木挽ノ米吉ト云フ者五十餘歳外一人出稼ノ者都合兩人彼ノ山間ニ居住シ木挽ヲ以テ業トセシカ或日米吉近林へ樹ヲ伐リニ出テ一人モ外出セリ然ルニ我家ノ方ニ當リ丁々ト樹ヲ伐ルニ等シキ音ス米吉程ナク帰宅セシニ豈計ラン我家ノ内ニ大ナル魯人兩人居タリ皆刑人ニシテ脚間ニ鉄鎖ヲ施シアレガセラナシタ

ル者魯人重刑ノ者ハ膝ヨリ少シ高ノ両股ニ鉄
 リ鎖ヲテ歩スルニ適宜ノ距離ヲ定メ左右ニ
 固定シタル者ニシテ安サレハ必スカヲカト
 鳴リテ急ニ逃走スルハサヌ物ヲ以テ脚間ノ
 鎖ヲ打切り且ツ米金衣服ノ類ヲ盗ミ出サント
 ナシ居タリ米吉之ヲ捕縛セント銭ヲ携ヘタル
 儘声ヲ掛ケ傍ヘ近寄シニ右刑人米吉ノ携ヘタ
 ル銭ヲ見テ之ヲ奪ハント手ヲ掛ケ雙方ヨリ挽
 合フ内米吉心ニ若シ此銭ヲ渡シナハ彼必ス我
 ヲ殺スナラント精カヲ出シ張合フハヅミニ銭
 彼カ横腹ニ當リ忽チ昏倒ス一人ノ魯人ハ之ヲ

見テ逃出セリ米吉尤モ偶然ナセシ事トハ雖モ
 大ニ狼狽シ急ニ之ヲ我開拓支廳ニ訴フ而シテ
 支廳官員ト彼カ役人ト雙方立會検査アリシニ
 右米吉口書ノ次第相違ナカリシカハ彼魯人ハ
 刑中破刑ノ罪アルヲ以テ事ナク相濟ミ米吉ハ
 貪著之レナク今尚小實ニ存在セリ其后魯人ノ
 盗ヲナス者少シク穩ナリ右ハ當島在留ノ魯人
 主任官ヨリ我支廳ヘ豫テ依頼セシ其言ニ若シ
 彼カ刑人罪ヲ犯シ逃走シ或ハ魯人暴動ヲナス
 者アラハ速ニ捕縛シ其段演述イタシ呉レヨト

ノコナリ依テ此事件ハ故障ナク濟タルナリ都
 テ魯人ハ酒ヲ好ミ休日ノ折ハ毎ニ我人民ヨリ
 酒ヲ買求テ飲ム飲メハ必ス暴行ヲナス依テ魯
 ノ主任官ヨリ酒ハ一切賣渡申サズ様頼ミ越シ
 タリ故ニ我人民若シ彼ニ酒ヲ賣與スレハ二十
 日懲役セラル、由ナリ
 方今此島ニ日本人ト魯人ト雜居スルカ故ニ動
 モスレハ争鬪ノ事件ニ及フ未終ニ如何ナル事
 ヲ生スルカモ圖リ難シ之レニ因テ早ク其經畧
 ヲ區分シ後患ヲ未然ニ豫防スルノ策アリタキ

ト也此島五十度ノ限リハ静^シ香川ノ邊ヲ以テ境
 畧トスト云

陸奥ノ壺ノ石フミ置キカヘテ今ヤ立テナン
 此島カ根ニ

同行官崎モマター詠ヲナス

赤金ノ御柱モトヲ打モリテ静ケキ御代ノ春
 ヲ經ナ、ン

官崎楠溪ノ鎮坐ノ神祠ニ詣テ、
 民カ根ヲ太シク植テ此神ノ御社榮フ時ヲコ
 ソマテ

白土ヨリ十里許西海岸ニシテ字ナヤスト云処
 = 銅坑アリ礦ヲ札幌ニ遣リ經驗セシニ上品ナ
 リト又西富内ヨリ四五里手前ニ字トコンボト
 云処ニ石炭坑アリ是亦上品ト雖モ人力足ラス
 シテ發出シ得ルコト能ハス實ニ遺憾ノ次第ナリ
 元米澤産ノ商富松ナル者先年ヨリ楠溪ニ来リ
 テ豆腐渡世ヲナシ居タリ嘗テ魯ノ女子ヲ妻ト
 ナサント内約シ此頃其段支廳へ願出セシトツ
 右ノ者魯語ニ能ク通シ且ツ魯人モ亦親シク見
 知りタリ本日午后四時頃ヨリ右富松同道宮崎

ト俱ニ母子泊魯人居住ノ地へ至リ彼是ヲ見聞
 ス此日魯國ノ祭日ニテ諸業ヲ止メテ遊樂ヲ許
 セリ兵員ノ者残ラス正服正冠ヲ装ヒ午后正五
 時武裝呼集ヲナシテ人員ヲ検査ス式法嚴ナリ
 ト雖モ伍列整ハス右呼集前兵卒各屯所内ニテ
 武器ヲ掃淨セリ本日兵卒各名へ酒五勺宛ヲ與
 ヘシトソ午后六時頃歸宿

八月九日大雨風 暑寒辰 午前六時 檢 六十八
 度 午后二時 檢 六十九度

當六月中旬頃魯ノ本國ヨリ報知ニ曰ク當八月

中ニ「バーチリノ」ト云魯ノ重官ノ者當地へ
 巡視セシムル旨蒸氣ノ便ヲ以テ申シ越シタル
 由官位ハ大約我開拓次官ノ等ニ當レル由饗應
 ノ為ノ生キタル鴈一雙矮狗牝牡蜜柑金柑ノ三
 品ヲ右富松ニ八月中ニ調達呉レト注文セシト
 ソ鴈ハ一雙ニ付十五圓ノ約束ナリト
 當五月魯ノ「カビタン」チボロノ「フ」遠淵ヨリ母
 子泊ニ来リシ後彼カ兵卒大ニ謹慎セリト都テ
 魯人ノ家屋ハ丸木ノ材ヲ以テ井樓ニ組立窓ニ
 ハ「カ」ラスヲ張ルナリ當時役人邸等五六ヶ処造

營中ナリ然ル上尚年中ニ十ヶ所訖管築ノ手圖
 リノ由
 當地昨年暑度最高ナルモノハ八十二三度ニ過
 ス嚴寒ノ太タシキモノハ流氷降りテ硝壺ノ中
 ニ入り再ヒ昇リ得サルト正月一日ヨリ都合三
 日間ナリト亦雪ノ積リシト六尺ニ過ス然ルニ
 雪ハ皆微塵ノ如クニシテ風アル日ハ颺散スル
 ト恰モ霧ノ如シ春暖ヲ得テ降ル雪ハ綿ノ如ク
 大ニ形ヲナセリ按スルニ寒氣嚴ニシテ雪ハ
 形ヲ結フコトヲ得ス流氷ノ硝壺中ニ匿ルハ氷

凍リテ流動スルヲ得サルナル可シ右微塵ノ如キ雪降りテ人迹絶タル節土人犬ヲシテ雪車ヲ挽シム雪車ノ形小サキ舟ノ如ク細キ木ヲ組ミテ拵ヘタル者ナリ是ヲ挽クニ犬十一匹許ヲシテ挽カシム其内先頭ノ犬ヲ立テ道ヲ誘導ナサシムルニ土人ト雖モ方向ヲ失スル雪中ヲ自由ニ挽行クト一日ニ二十里内外ト云近年魯人モ此雪車ヲ用ユ故ニ犬ノ價高貴ナルト先頭ノ良犬ハ大凡三十金許餘モ三圓ニ下ル者ナレ土人犬ヲ飼置クト一戸各十二三匹ナリト

山^カ麻^モト云草信州邊ニ製シテ布ニ織ルモノナリ此草南北両島ノ地ニハ都テ澤山ナリ然レモ莖ニ針アリテイラクトシ陸奥邊ニ生スルモノト少シク異ナリ當地ノ土人秋分ノヲ近リ冬節ニ至リ之ヲ雪中ニ晒シ織テ衣類トナス其品アツシニ似タレモ製シ方アシキカ故ニ強カラス

八月十日快晴 暑寒辰 午前六時檢 六十七度
 午后二時檢 七十二度

島中鼈ノ大ナルモノ多シ魯人大ニ其革ヲ愛ス故ニ一枚ノ革價大凡三圓許ナリト云

柄太西海岸ヨリ満州ノ地へ家モ近キ処ハ稍海岸ノ末へ至リナツコ岬ト云処ヨリ満州イリク
ノ地へ海上大凡五六里ナリ此地ニイリクマ
山ト云高山アリ

楠溪^{シノヒメ}寄留官費雇大工稼賃錢上等ハ五十錢中等
ハ四十七錢五厘下等ハ四十錢右ハ午前八時ヨ
リ午后四時マテノ時間ヲ以テス日用稼ハ一人
二十五錢ト雖モ勤惰ニ依リ増賃ヲ得ルハ働ニ
アリ

八月十一日快晴 暑寒辰 午前六時檢 六十五

度 午時檢 七十二度

楠溪ヨリ二十丁許以南ニ大泊^{或ハボア}開
拓使役邸四戸厩二棟番家一戸農民長家八棟當
時大工九人農民十人土人家二十軒許
楠溪ヨリ四里ニシテヲフヘトマリト云番家一
軒土人家五軒許六里ニシテイヌクレマナイト
云土人家十戸許八里ニシテカマトマリト云チ
ビシヤニ會所ノ出張番家アリ昨年魯ノ刑人番
家守男女三人ヲ暴殺シ其家ヲ燒キタルハ此処
ナリ是ヨリチビシヤニヘ一里

小實^{セシヤ}ハ四五年前ヨリ役邸通行家ヲ建築シ大主
 典東善八郎^{ホヤ志}此^{ホヤ志}地ニ居留シテ人民ヲ教育
 ス此人^{ホヤ志}劍道修行トシテ南北兩島ヲ遊歴シ數年
 前ヨリ此^{ホヤ志}處へ來リテ北地ノ開拓ニ大ニ盡カス
 ル人ナリト此^{ホヤ志}處ヨリ魯ノ元本部トナセシ遠淵
 ノ地へ四里ナリ當時小實ニハ魯人ノ家屋僅二
 戸アリ此地楠溪ニ次クノ寂要地ナリ
 午前四時開拓使用艦雷電丸幸ニシテ小樽港へ
 向ツテ出帆ス宮崎ト俱ニ乘込同七時楠溪灣
 ヲ發ス此^{ホヤ志}レハ軍艦ニシテ長サ二十七間幅五間

火輪ハス^ホコ^ロツ^ツア^ナリ舟行遲延ナレ^レ帆ノ利
 キ^コ順風ニ向ツテハ太^タ神速ナリ中等下士官
 部屋ニハニツ^ツバ^ンド^ドエ^ンヒ^{ール}ド^ド銃二十挺^テ
 ツ^ツケ^ン上ニハ十二^ニ斤^ナボ^レヲ^ン加農二門ヲ装
 置セリ乗合十一名ナリ
 八月十二日快晴 暑寒辰 午前六時艦中檢
 十三度 午后二時同 七十二度
 拂曉ノト^ロ岬ニ至ル海上波濤穩ニシテ白主
 ノ渡海地上ヲ行クカ如シ黄昏風連別ノ沖ニ至
 ル

八月十三日快晴 暑寒辰 午前六時檢 七十六度 午后二時檢 七十八度

黎明増毛ノ岬ニ至ルト雖モ折節石狩地方ヨリノ風烈敷シテ小樽港内ニ入ルト難ク漸クニシテ午后五時三十分小樽港佐野某方へ投宿ス

八月十四日風雨 暑寒辰 午前六時檢 七十六度 午后二時檢 同度

蒸氣艦渡海開ケテヨリ其功用ノ偉ナル喋々辨ヲ待ス初メ柄太へ跋渉スルヤ小樽ヨリ宋也ニ至ルノ日數十日間自主ノ渡海難波ノタメニ阻

妨セララル、十日餘宋也ヨリ柄太楠溪ニ至ル四日間道路ノ嶮難ニ曉風夜露ヲ侵レ一葉ノ扁舟ヲ狂濤暴波ニ托シテ心身ヲ勞シ飢渴ニ困スルヲ言語ニタヘタリ一旦蒸氣ノ便ヲ得シヨリ二十四日ノ困難ニ換ルニ雇ニ二日間餘安坐閑話シテ所思ニ著スルヲ得タリ世人蒸氣艦ノ利器タルヲ知ソト切ニ企望所也魯ノ伯德^{パイトル}琢帝ハ其國航海術ノ不開ヲ歎キ自ラ水夫トナツテ和蘭ニ渡リ其術ヲ習熟シ遂ニ本國ニ教へ弘メラレシト云後來其國ノ強大ニ進ム故アル哉

當港七八年前ハ人家漸ク百餘戸ナリシカ今日
 ニ至テハ既ニ六百餘戸此頃漸次ニ家屋ヲ造營
 スル者數十戸勢ヒ已ニ一都會ノ光景ヲナセリ
 是レ札幌ニ開拓使本部ヲ置レシヨリ當港又本
 部ノ要路タルヲ以テ人氣ノ進ムト斯ノ如シ是
 所謂事物集合ノ力ハ政府ノ勢ニ依テ變化スル
 者ナリ開化ノ地ニ於ケル人民自主ノ權ヲ以テ
 共立ヲナスト雖モ未開ノ地ハ其人民政府ノ權
 カニ由ラサレハ其成功ヲナス能ハス今日民事
 ヲ隆盛ニシ開化ノ域ニ進歩セシムルハ他ナシ

土地ノ景況人民ノ衆寡ヲ斟酌シ其地方ノ官吏
 適宜ノ誘導方ヲ起シ知ラス識ラス其域ニ至ラ
 シムルヲ以テ上策トスヘシ一時開化ノ名ヲ求
 取スルタメニ過行激爲ヲ施行セハ必ス寸進尺
 退ノ弊害ヲ生スヘシ顯去月中旬當港ヨリ柄太
 ニ至リ今日再ヒ當港ニ歸來シ市中ノ景況ヲ視
 察スルニ厯三旬餘ニシテ市街新ニ家屋ヲ造營
 スル者大屋己ニ五六棟小屋ハ十餘戸其景況須
 臾ニ進歩セリ何ニ因テ斯ノ如クナルヲ識ラス
 或人曰去月下旬札幌本廳盛大ニ壯嚴アリシヨ

リ民氣安著シ事業モ亦大ニ競起セリト實ニ民ノ集合力ハ政府ノ勢ニ依テ變化スルノ理斯ノ如シ

八月十五日快晴 暑寒辰 午前六時檢 七十二度

午後二時檢 九十二度

本日港内碇泊船數六十八艘其中洋船蒸氣二艘帆前一艘

昨今ノ溽暑ニテ屋瓦ヨリ炎氣ヲ發シ肌膚ニ感觸スル甚シ日中ハ行路人稀ナリ

八月十六日快晴 暑寒辰 午前六時檢 七十五度

度 午後二時檢 八十一度

北海島中魚油ノ盛ナル之レ亦一大産物ナリ各地皆日用ニ供セサルナシ此油ハ皆鯊ヨリ取ルナリ鯊ヲ身缺ニシ其頭骨ヲ絞リテ油ヲ製ス或ハ見切リトテ盛ニ鯊漁ヲナス時ハ鯊取餘リテ之ヲ身缺ニスル暇ナク腐敗ニ至ルモノヲ以テ油ヲ製スルモアリ其メ粕ナルモノヲ本邦各地へ輸出シテ肥糞トナス其益タル皆人ノ知ル所ナリ亦鯊油ハ太タ上品ニシテ價モ貴ク食料ニ宜シトス東海岸根室ニハ大ニ之ヲ製ス此油ハ

其色赤シカスハ油ハ之レニ亞ク鱈ノ油ハ食料ニ用ヒ難シ此三種ノ油ハ鯨ノ如ク夥多ニハ製シ得ス

八月十七日積陰蒸暑午雨塵ニ炎氣ヲ露ス

暑寒辰 午前六時檢 七十五度 午後二時檢 八十

三度

八月十八日快晴 暑寒辰 午時艦中檢 八十六

度

午前十時開拓使用艦雷電丸ニ乗シ同時小樽港ヲ發ス

此日坤ノ風烈シクシテ火輪ノ速ヲ抑留シ舟行一時間僅カ一里許黄昏與市ノ沖ヲ過ク

八月十九日陰 暑寒辰 午前七時檢 八十四度

午時檢 八十六度

拂曉壽都ノ沖ヲ過キ黄昏江差ノ港ヲ見ル

八月二十日快晴 暑寒辰 午前七時檢 八十五

度

拂曉久遠ノ岬ヲ越ヘ午前十時函館津田某ノ家ニ著ス

八月二十一日快晴 暑寒辰 午時檢 八十六度

八月二十二日午后微雨 暑寒辰 午時檢八十
七度

八月二十三日陰 暑寒辰 午時檢八十二度

八月二十四日晴 暑寒辰 午時檢八十二度

八月二十五日午前晴午后風雨 暑寒辰 午時
檢八十一度

八月二十六日折々雨 暑寒辰 午時檢八十二
度

八月二十七日陰折々雨 暑寒辰 午時檢八十
度

八月二十八日陰寒味アリ 暑寒辰 午時檢七
十四度

八月二十九日雨 暑寒辰 午時檢七十七度

八月三十日雨午前十時晴 暑寒辰 午時檢八
十四度

八月三十一日陰午前十時后微雨 暑寒辰 午
時檢八十二度

九月一日快晴 暑寒辰 午時檢八十五度

九月二日快晴 暑寒辰 午時檢八十五度

九月三日快晴 暑寒辰 午時檢八十二度

九月四日快晴 暑寒辰 午時檢八十度

追録

九月五日再ヒ函館ヲ發シテ札幌ニ至ル此日潺暑盛ニシテ行路炎塵大ニ肌膚ニ感觸ス午前九時函館ヲ發ス紀行ハ當六月三日ヨリ概畧ヲ記載セシ故贅セス爰ニ参考ノ為メ一二ノ遺事ヲ補記ス

函館ヨリ三里八丁ニシテ中島郷ト云ルアリ七重村驛馬繼立所ヲ廢シ昨今ヨリ此処ニ繼立所ヲ設ケタリ此処ヨリ七重村ヘ一里二丁七重村

ハ當六月經歷ノ節ト今日ノ景況ヲ察スルニ商家ノ造管數戸ニシテ人氣ノ進歩市街ノ體裁等又一層面目ヲ新ニセリ此頃開拓使勸農局暨役邸漸々造管アリテ昔日ノ村落ニアラス峠下村ヨリ二里ニシテ峠ノ麓ニ蕁菜沼ト云湖池アリ此沼大ニ蕁菜ヲ生ス此ヲ食スルニ甚美ナリ又蕁菜ノ類ヲ生ス路ノ左傍湖水ニ浴フテ三階ノ高樓ヲ建造シ旅籠渡世ヲナス其名ヲ宮崎重平ト云此者此処ニテ當年春蠶ヲ養ヒシニ龜田ノ七重製ノ蠶種五枚附ノ者四十八枚ヲ育セシニ

一枚ノ種紙ヨリ大約繭八斗ヲ得ルト壹升ノ繭
 ヨリ上品ハ絲目大九十二匆ヲ得下品ハ八匆ヲ
 得絲ハ極品ナリト種掃ノ日ヨリ早キハ四十四
 五日ニシテ繭トナリ遅キハ五十日ヲ經ルト云
 此頃當春蠶ノ内ノ走リヲ以片夏ヲ育セリ繭大
 キクシテ勢ヒ甚タ強シ都テ此邊ハ高峻山岳ノ
 麓ニシテ酸氣モ亦太シク雪ノ降ルモ石狩國ヨ
 リハ甚シト然レモ年分兩度ノ蠶ヲ生育ス素ヨ
 リ夏蠶ハ世人皆嫌フ処ト雖モ此地ノ試檢ニ於
 テハ内地ト更ニ變ルコトナク生絲モ亦純粹ナリ

頭因テ謂ヘラク三都其他各地ノ富有大家共同
 立會シテ結社ヲ設ケ全島中山野廣漠ノ地ヲ拓
 キテ悉ク桑田トナシ大ニ養蠶ノ法ヲ設ケ器械
 ヲ以テ數百斤ノ絲ヲ製シ函館港ニ於テ之レヲ
 洋外人ニ賣取セハ其益許多ニシテ又本邦富有
 ノ大基ヲ起サン有志者爰ニ注目盡カアラシム
 ヲ希望ス頭嚮キニ札幌郡岳^{オカ}珠^{タマ}勸農試檢所ニテ
 見聞セシ養蠶ハ年分一度ニ限レリ春夏ノ間ニ
 生スルニアラサレハ難シト然ルニ又今日此知
 見ヲ開ク之レ氣候ノ差違ヨリ生セルカ或ハ養

蠶ノ術未タ開ケサルニ因ル歟尚後日之レヲ試
 驗シタキナリ
 頭函館滞留中一奇人ニ邂逅ス元ト會津藩人ニ
 シテ圓山抱石ト云此人嚮キニ本藩ニ於テ文武
 両校ノ總宰トナリ大ニ盡カセシ人ナリ今ヤ隱
 逸シテ北海ノ勝區佳境ヲ遊歴シ詩文書画ヲ以
 テ生涯ノ娛樂トナス 頭札幌ヨリ函館ヘノ歸路
 室蘭港ニシテ復タ圓山氏ニ相逢フ情話數日羈
 旅ノ鬱氣ヲ發散セントセシニ船人解纜ノ報告
 頻リナレハ遺憾ナカラ匆々離別ヲ告ク圓山氏

即時一詩ヲ賦シテ贈レリ因テ爰ニ摹刺ス

今朝相見勿忘未擬一日
 信帆少海涯浩通
 文以百化有
 以在萬船又甲州

昭和六年九月廿六

意蘭港送

林三崎直學兄歸

石川

園心

北海紀行卷之五大尾

